『夜の寝覚』における『源氏物語』桐壺巻と長恨歌の影響

――「帝闖入事件」の二度目の贈答を端緒として――

池田彩音

一　問題の所在

『夜の寝覚』は、『源氏物語』から少なからぬ影響を受けている。そうした影響を見出せる場面の一つに、帝による寝覚の上垣間見の場面がある。垣間見場面では、「長恨歌」、あるいは「長恨歌」を踏まえて書かれた『源氏物語』桐壺巻の影響が散りばめられている。

寝覚の上の垣間見は、帝の母である大皇の宮の計らいによって行われた。夜に大皇の宮のもとを訪れた寝覚の上の姿がよく見えるよう、火を近くで灯す口実として用いられたのが、「長恨歌の絵」であった。

「……上〔帝※稿者注。以下同。〕より、この昼つかた、長恨歌の絵賜はせたりつるを、『まづ、見てこそは』とてまゐらせざりつる。……」　（『夜の寝覚』巻三・二五二―二五三頁）[1]

帝から「長恨歌の絵」が大皇の宮に下されたとの記述は物語中には見えない。どこまでが大皇の宮の口実かは定かでないものの、大皇の宮の発言は、「このごろ、明け暮れ御覧ずる長恨歌の御絵」（桐壺巻・①三三頁）[2]と、「長恨歌の御絵」を愛でていた桐壺帝と、『夜の寝覚』の帝を重ね合わせるかのようである。

実際、桐壺帝が桐壺更衣を楊貴妃と比較しつつその素晴らしさを想起したように、『夜の寝覚』の帝も楊貴妃と比べて寝覚の上の美貌を評価している。

たをたをと、なつかしくなまめきたるさまなど、〔帝〕「長恨歌の后の、高殿より通ひたりけむかたちも、うるはしうきよげにこそありけめ、いとかう、愛敬こぼれてうつくしうにほひたるさまは、えこれに及ばざりけむ」とぞ、おぼし知らるる。

（『夜の寝覚』巻三・二五四頁）

絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師といへども、筆限

りありければいとにほひすくなし。太液芙蓉、未央柳も、げにかよひたりし容貌を、唐めいたるよそひはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。（桐壺巻・①三五頁）

「長恨歌の后」、つまり楊貴妃の容貌が、二重傍線部「うるはしう」とあるのは、桐壺帝が語る「絵に描ける楊貴妃の容貌」の記述と一致する。さらに、傍線部のように「なつかしく」「にほひ」あふれる寝覚の上の様子は、桐壺帝が思い出した桐壺更衣の姿と重なる。

さらに、寝覚の上がその場を退こうとする箇所にも影響が見られる。

〔寝覚の上〕「さらば、またも。この御絵は、内侍督に見せはべりてを」とて、ゐざり出でたまふ後ろで、髪の、隙なう凝り合ひて、裳の裾にゆるゆると引かれたるさまなど、絵にかかむに、筆及びなむやとぞ見ゆる。もてなしなどは、鶯の羽風もいとはしきまで、たをたをとあえかに、やはらぎなまめいて、……（『夜の寝覚』巻三・一二五六頁）

点線部「絵にかかむに、筆及びなむやとぞ見ゆる」は、前に挙げた桐壺巻の点線部「絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師といへども、筆限りありければいとにほひすくなし」を踏まえると考えられる。[3]

「長恨歌」との直接の影響関係については、小松登美氏[4]や、大槻福子氏[5]の論で詳細に検討がなされている。小松氏によると、前掲の「たをたをと、なつかしくなまめきたるさまなど」（『夜の寝覚』二五四頁）、「たをたをとあえかに、やはらぎなまめいて」（『夜の寝覚』二五六頁）という寝覚の上の様子に、「長恨歌」の「侍児扶起嬌無力〔侍児扶け起せども嬌びて力無し〕[6]」が踏まえられているという。小松氏、大槻氏の指摘は、この垣間見場面にとどまらず、「長恨歌」が『夜の寝覚』の主題に関わりうるものとして扱われている。

ここで問題とするのは、「長恨歌」と関わって、はっきりと示された桐壺巻の引用の意味に言及するものが見当たらないことである。ここに「長恨歌」の直接の影響が見出せることについて異論はない。しかしながら、『夜の寝覚』が桐壺巻を踏まえた意味を、単に「長恨歌」の派生的なものとして捉え、等閑視してよいのだろうか。

そこで本稿では、この場面で桐壺巻を踏まえることが、後の物語展開を必然的に導くためのものであったことを明らかにする。そのために、いわゆる「帝闖入事件」での二度目の贈答の典拠を考察し、『夜の寝覚』が「長恨歌」と桐壺巻を意図して同時に用いようとしたことを指摘する。さらに、『夜の寝覚』は『源氏物語』が「長恨歌」や「長恨歌伝」を用いて物語を展開させていったことを踏まえた上で、そうした典拠そのものを想起させる表現

をも物語に取り込んでいることを提示する。

二　「帝闖入事件」での二度目の贈答の典拠

寝覚の上垣間見場面に桐壺巻が踏まえられた意味を考える手掛かりとするのが、「帝闖入事件」での二度目の贈答の場面である。結論を先に言えば、帝の贈歌には桐壺巻と「長恨歌」双方の影響が見え、『夜の寝覚』は桐壺帝が自身を「長恨歌」の玄宗皇帝に重ねていたことを踏まえている。少し長くなるが、贈答の前の地の文から引用する。

……やがて立ち添ひて、見送らせたまへば、二間ばかり隔てて、御供の人々、おのおのうち臥しつつ、有明の月の、明け方になりにける霞にもさはらず、さやかにさし入りたる影に、打ちたる御衣を上に着たまひたるに、隙なくかかれる髪のつやも、ひとへに輝き合ひたる、御頭つき、様体、扇さし隠したまへるさまなど、ただかきまぜのよろしきだに、色濃き打目には、もてはやさるる月影はをかしう見ゆるを、まいて、あまりゆゆしく、この世のものとぞ見えぬや。よきほどに、ゐざり出でたまひぬるを、陰のかたに引きとどめさせたまひても、なほ、〔帝〕「いみじのわざや」と、御涙を尽くさせたまひつつ、

〔帝〕雲のうへにすみはつまじき月を見て心のそらになりはつるかな

御供の人々の聞くらむほども、いとわりなく苦しきに、きこえさせむかたなけれど、ただ、疾くのがれ出でなむとおぼすに、心をのべて、

〔寝覚の上〕雲居にはおよばざりける身を知ればしばしもすむに影ぞまばゆき

（『夜の寝覚』巻三・二八五―二八七頁）

別れの贈答をして寝覚の上が帝のもとを退出しようとした際、「有明の月」が寝覚の上を照らす。その、「この世のもの」とも思えない美しさに、帝は寝覚の上を引き留め、二度目の贈歌を詠みかける。それに対し、寝覚の上はこの場を早く逃れたい一心で答える。

この場面の贈答については、従来の注釈書は掛詞や縁語を指摘するのみで、典拠となった和歌を示すものは見当たらない。一例として、「新編日本古典文学全集」の帝の贈歌に対する頭注を掲げる。

「月」は寝覚の上をたとえ、「雲のうへ」に宮中、「澄み」に「住み」を掛ける。「心のそら」は茫然となる意。「雲のうへ」「澄む」「月」「空」は縁語。（二八六頁）

一方、月が寝覚の上を照らすという描写があることなどから、

〔帝〕雲のうへにすみはつまじき月を見て心のそらになりはつるかな　（再掲、『夜の寝覚』巻三・二八六頁）

傍線部で示したように、「雲のうへ」「月」「すむ（澄む、住む）」の語が、『夜の寝覚』の帝の歌と共通している。『夜の寝覚』成立以前には、これほど言葉の一致する例は他に見出せない。

桐壺帝の歌の内容は、桐壺更衣を亡くして悲嘆にくれる桐壺帝が、宮中から桐壺更衣の里にいる更衣の母や光源氏に思いをはせる、というものである。自分のもとに女を留めておけないことを嘆く『夜の寝覚』の帝の歌とは、一見内容的に隔たりがあるように思われる。しかし、この桐壺帝の歌の背景に、楊貴妃を失った玄宗皇帝の悲嘆が踏まえられていると想定すると、この二つの和歌はかなり近いものとして見えてくる。

この仮説を成り立たせるのに欠かせないのが、『和漢朗詠集』に採られた源順の「対雨恋月〔雨に対ひて月を恋ふ〕」の題で詠まれた句である。

楊貴妃帰唐帝思　〔楊貴妃帰つて唐帝の思〕
李夫人去漢皇情　〔李夫人去つて漢皇の情（こころ）〕
（『和漢朗詠集』巻上・秋・十五夜付月・源順・二五〇、一三九頁）[9]

この源順の「対雨恋月」は、次に示す「長恨歌」の二句を踏まえるとされる。同じく『和漢朗詠集』から引用する。

先行研究では『竹取物語』からの影響が指摘されている。長南有子氏は、この贈答について、「『竹取物語』で帝がかぐや姫と会い、袖を捕らえたがかぐや姫が影となってしまったため、連れ帰ることを断念した際の贈答歌を彷彿とさせる[7]」とする。長南氏が指摘した『竹取物語』の贈答歌を示す。

〔帝〕帰るさのみゆき物憂くおもほえてそむきてとまるかぐや姫ゆゑ
御返りごと、
〔かぐや姫〕むぐらはふ下にも年は経ぬる身のなにかは玉のうてなをも見む　（『竹取物語』六二―六三頁）[8]

『竹取物語』の帝は、かぐや姫を宮中に連れて帰ることができないことを嘆き、かぐや姫は自らの身を卑下して帝の側に仕えることを拒む。確かに、『夜の寝覚』の帝と『竹取物語』の帝、かぐや姫と寝覚の上の心中や態度には、近いものがあると言える。しかし、直接の典拠と見るには、言葉の一致が少ないことが否めない。

そこで、『夜の寝覚』の帝の贈歌とより言葉の一致が認められる和歌として浮かぶのが、桐壺帝の和歌である。

〔桐壺帝〕雲のうへも涙にくるる秋の月いかですむらん浅茅生の宿　（桐壺巻・①三六頁）

行宮見月傷心色　〔行宮に月を見れば心を傷ましむる色〕
夜雨聞猿断腸声　〔夜雨に猿を聞けば腸を断つ声〕
（『和漢朗詠集』巻下・恋・白居易・七七九、四〇六頁）

「行宮」は、都を逃れた蜀での玄宗の居所で、すでに楊貴妃はこの世にいない。月を見て楊貴妃のことを想っては悲しみにくれ、雨の夜に猿の鳴き声を聞いては悲痛な思いも増さるばかりである。この二句には、順の句の題にある「月」と「雨」が見える。順は、雨によって見ることの叶わない月を求める思いを、楊貴妃を失った玄宗や、李夫人を亡くした武帝の悲嘆に重ねたのである。これらの句はともに『和漢朗詠集』に載っていることから、平安時代によく知られていたと考えられる。

新間一美氏[10]は、「平安びとが恋に結びつけて「月」を眺める時には必ずやこの句〔行宮見月傷心色〕を思い出したであろう」（八三頁）とし、「長恨歌」のこの句の平安時代における影響を指摘した上で、「帝も「雲の上」にいながら、涙にくもる「傷心」の「月」を眺めるしかないのである」（八五頁）と、桐壺帝の和歌とも関わることを論じている。新間氏がこの句の影響下にあるものとしてまず例示されたのが、前に掲げた源順の句「楊貴妃帰唐帝思」なのである。

さらに、「長恨歌」の「行宮見月傷心色」を題にした和歌の作例もある。

行宮見月傷心色
おもひやるこゝろもそらになりにけり　ひとりありあけの月をなかめて
（『大弐高遠集』二五七）[11]

行宮見月
みるままにものおもふことのまさるかなわが身よりづる月にやあるらん
（『道済集』二四四）[12]

加えて、次の歌もこの句を踏まえた作例と見ることができる。[13]

（長恨哥のうた、人のよみはへるに）
おもひきやみやこのくものうへならてこゝろそらなる月をみむとは
（『道命阿闍梨集』三〇〇）[14]

これらの和歌から気づかされるのは、『夜の寝覚』の帝の和歌との類似性である。今一度帝の歌を挙げる。

〔帝〕雲のうへにすみはつまじき月を見て心のそらになりはつるかな
（再掲、『夜の寝覚』巻三・二八六頁）

特に『大弐高遠集』の傍線部「こゝろもそらになりにけり」、『道命阿闍梨集』の傍線部「こゝろそらなる」といった表現は、帝の歌の傍線部「心のそらになりはつるかな」と通じる。「月を見て心のそらになりはつるかな」とは、「見月傷心色」をほとん

どそのまま言い換えた表現と見ることができる。

このように、『夜の寝覚』の帝の歌は、「月」「心のそら」という語によって、平安時代によく知られていた「長恨歌」の「行宮見月傷心色」の句を踏まえると同時に、玄宗皇帝に自身を重ねた桐壺帝の歌の「雲のうへ」「すむ」という語を用い、桐壺巻をも踏まえようとしたことが読み取れる。おそらくその発想のもととなったのは、桐壺巻である。桐壺帝のこの歌に対して、『源氏物語』の古注は「長恨歌」の影響を指摘していないけれども、『夜の寝覚』はその影響を読み取った上で、「長恨歌」の当該句を想起させるような表現を用いたのではないか。

一方、寝覚の上の和歌は、帝の歌の「雲」「すむ」を共通の語として詠む。宮中を表す言葉として、帝の歌の「雲のうへ」をそのままを用いるのではなく、「雲居」と言い換えた点が注意される。帝が自らと寝覚の上を玄宗皇帝と楊貴妃、あるいは桐壺帝や桐壺更衣という深く愛し合った二人に重ねようとするのに対し、寝覚の上はやはり、『竹取物語』の世界を踏まえて自らを卑下し、帝を拒否しようとしていると考えられる。しかしながら、それは単なる内容的な類似に留まらない。寝覚の上の和歌には、『源氏物語』絵合巻での、『竹取物語』への批判と重なる語が見えるのである。

右は、かぐや姫ののぼりけむ雲居はげに及ばぬことなれば、誰も知りがたし。この世の契りは竹の中に結びければ、下れる人のこととこそは見ゆめれ。ひとつ家の内は照らしけめど、ももしきのかしこき御光には並ばずなりにけり。

（絵合巻・②三八〇―三八一頁）

雲居にはおよばざりける身を知ればしばしもすむに影ぞまばゆき

（再掲、『夜の寝覚』巻三・一八七頁）

絵合巻では、左方が『竹取物語』、右方が『うつほ物語』を支持する形で論戦が繰り広げられる。右方の主張では「雲居」は天の意で、宮中の意で用いられていないものの、傍線部「雲居」「及ぶ（の否定形）」「知る」がかなり近くで用いられている。さらに、絵合巻の「ももしきのかしこき御光には並ばずなりにけり」と、『夜の寝覚』の「しばしもすむに影ぞまばゆき」という表現は、「月」の光を帯びる女の美しさよりも、帝の威光のほうを持ち上げている点で同じである。

かぐや姫の歌「むぐらはふ下にも年は経ぬる身のなにかは玉のうてなをも見む」（再掲、『竹取物語』六二―六三頁）に見えた「身」に対する卑下を、『源氏物語』絵合巻の表現を用いることで、さらに補強したのが寝覚の上の和歌の表現だと言える。

以上のように、「帝闘入事件」の二度目の贈答における帝の歌には、「長恨歌」と桐壺巻を同時に踏まえる表現が用いられており、垣間見の際に見えた「長恨歌」と桐壺巻を思わせる表現は、意図して同時に用いられたものだと考えることができる。加えて、それがどちらも帝によるものであり、寝覚の上自身の認識と

は異なることも押さえておく。

三　寝覚の上と同じ典拠を分け与えられた督の君

それでは、なぜ帝の視線から、寝覚の上は楊貴妃や桐壺更衣と重ねられるのか。この問題を考える前に、寝覚の上の垣間見場面での記述が、所顕で帝に初めてはっきりと姿を捉えられた督の君の記述と、共通の典拠を分け与えるかのように書かれていたことを確認する。この問題は、寝覚の上の継娘である督の君の存在抜きには語ることができないからである。

昼渡らせたまひて御覧ずるに、人がら、ささやかにそびえて、あえかに、身もなく衣がちに、あてにらうたげに、このごろのしだり柳の心地して、いとにくからず、あはれと御覧じながら、〔帝〕「北の方〔寝覚の上〕あるぞかし」とおぼすに、御心化粧おろかならず。（『夜の寝覚』巻三・二四八頁）

もてなしなどは、鶯の羽風もいとはしきまで、たをたをとあえかに、やはらぎなまめいて、……

（再掲、『夜の寝覚』巻三・二五六頁）

宮〔女三の宮〕の御方をのぞきたまへれば、人よりけに小さくうつくしげにて、ただ御衣のみある心地す。にほひやかなる方は後れて、ただいとあてやかにをかしく、二月の中の十日ばかりの青柳の、わづかにしだりはじめたらむ心地して、鶯の羽風にも乱れぬべくあえかに見えたまふ。

（若菜下巻・④一九一頁）

一つ目が督の君、二つ目が寝覚の上、三つ目が『源氏物語』の女三の宮についての記述である。点線部については、「新編日本古典文学全集」頭注に、『源氏物語』の女三の宮の記述を督の君と寝覚の上とに「分けて生かしているようである」（二五六頁）との記載がある。

さらにここでは、督の君の特徴である、傍線部「あえかに、身もなく衣がちに」に着目する。これは、女三の宮の記述の傍線部「ただ御衣のみある心地す」とすでに似通っているが、女三の宮が所顕で光源氏に初めてはっきりと姿を見られた場面に、「いと御衣がちに、身もなくあえかなり」（若菜上巻・④七三頁）とあるのとかなり近い。着物に圧倒されてしまうほどの女君の弱々しさをいう。これと同様の表現が、「長恨歌伝」において、やはり初めて玄宗に姿を見られた、楊貴妃の様子に確認できる。

既出レ水、体弱力微、若レ不レ任二羅綺一。光彩煥発、転動照レ人。上甚悦。〔既に水を出づれば、体弱く力微にして、羅綺に任へざるが若し。光彩煥発し、転動して人を照らす。上甚だ悦ぶ。[15]〕

「羅綺」とは、薄手のあやぎぬのことで、傍線部は薄絹の衣にも耐えられないような弱々しさを表している。「長恨歌」では、

前に小松登美氏の指摘として引いた「侍児扶起嬌無力」が対応する箇所である。寝覚の上の記述が女三の宮と楊貴妃を踏まえるのと同じように、督の君の記述も「長恨歌伝」を用い、女三の宮と楊貴妃を踏まえて書かれていると考えられる。なお、寝覚の上垣間見の場面には、「長恨歌伝」の点線部で示したような、光り輝く美しさについても言及がある。以前引いた箇所と近い部分であることを示すために、少し長めに引用する。

あたりにほひ満ちたるさま、〔帝〕「目も輝くとは、これをいふにこそありけれ」と、御覧じ入るに、〔寝覚の上は〕絵に心をば入れたれど、なほ扇を放たぬ用意、ゆるぶべくもあらず。たをたをと、なつかしくなまめきたるさまなど、「長恨歌の后の、高殿より通ひたりけむかたちも、……

（『夜の寝覚』巻三・二五四頁）

傍線部は、『竹取物語』との関わりを論じる際に言及されてきた箇所である[16]。今、それを退けようとするのではない。しかし、「長恨歌伝」を視野に入れることで、督の君の特徴が女三の宮だけでなく、楊貴妃についても寝覚の上と共通の典拠を分け与えられていたと見ることができ、その意義は大きいように思われる。なお、ここで女三の宮が踏まえられたことについては、「帝闖入事件」における一度目の贈答の典拠と関わると考えているが、詳細は別稿を期すこととする。ここでは、『夜の寝覚』が女三の宮の記述に「長恨歌伝」を読み取ったことで、「長恨歌伝」そのものを用いた可能性があることを主張する。

四　督の君・まさこ君と藤壺・光源氏
―帝の寵愛の対象として

改めて、なぜ帝の視線から、寝覚の上は楊貴妃や桐壺更衣と重ねられるのかを考える。前章では督の君と寝覚の上が、女三の宮と楊貴妃の共通の典拠を分け与えられていることを示した。これに加えて、寝覚の上への帝の執着ぶりが、督の君への寵愛ぶりとして見なされていく記述が繰り返されており、それに関わるように「長恨歌」や桐壺巻を踏まえる表現が確認できる。

……「そのあたり」とばかりに心をかけて、〔帝は〕昼などもおはします。内侍督のおぼえのいみじきにとりなして、世には、愛でののしり、御方々には、いとやすからず、うれはしきことに、おのおの心を乱りけり。中宮ばかりぞ、「けにくからず、らうたげにおぼしめいたれど、御気色、いと三千人をきはむるほどにはあらざめるを。……昔よりおぼしそめてしこと〔寝覚の上〕の、目に近うてさぶらふに、御心の乱るるにこそあべかめれ。さて、督の殿がちにおはしますなめり。夜の宿直は、人にすぐるとも見えぬものを」と、心得たまひて、をかしと、おぼしめしけり。

（『夜の寝覚』巻三・二六一―二六三頁）

寝覚の上を垣間見した後、帝は寝覚の上に執着し、督の君と寝覚の上のいる登花殿をしきりに訪れる。周囲はそれを、四角囲み「内侍督のおぼえ」、つまり督の君への寵愛と見なす。中宮だけが、その真相を寝覚の上ゆえだと見抜く。注目するのは、傍線部「いと三千人をきはむるほど」との表現で、これは「長恨歌」の「三千寵愛在一身〔三千の寵愛一身に在り〕」を踏まえるとの指摘が諸注なされている。なお、帝は寝覚の上を垣間見した直後、次のようにも語っていた。

いみじき一の人の女、春宮の母といふとも、この人〔寝覚の上〕を、我、なのめに思はましやは。世の謗り、人の恨みも知らず、上なき位にはなしあげてまし。

（『夜の寝覚』巻三・二五九頁）

中宮をも差し置き、周囲の反発も顧みずに寝覚の上を寵愛しようという帝の発言は、桐壺更衣を寵愛した桐壺帝への批判的な言葉と近い響きがある。

「さるべき契りこそはおはしましけめ。そこらの人の譏り、恨みをも憚らせたまはず、この御事〔桐壺更衣〕にふれたることをば、道理をも失はせたまひ、今、はた、かく世の中のことをも思ほし棄てたるやうになりゆくは、いとたいだいしきわざなり」と他の朝廷の例までひき出で、ささめき嘆きけり。

（桐壺巻・①三七頁）

桐壺巻での「他の朝廷の例」とは、「楊貴妃の例」（桐壺巻・①一八頁）であり、「長恨歌」を踏まえている。『夜の寝覚』で中宮が「長恨歌」を踏まえる発言をしたのは、「長恨歌」を直接的に引きながら、帝の振る舞いが桐壺帝のように非難されうるものであったことを示すと考えられる。

さらに、寝覚の上が宮中を退出する場面にも、桐壺巻を思わせる記述が見える。

〔帝〕「もし、ありがたしと思ひ知り、参りたまふやうもやある」の御心用意に、正三位の位賜はせて、「いと若々しく、慕はしげなる御気色も、おぼつかなからず出で入りたまふべう」などおほせられて、車もうけたまはりて、宣旨下るを、「いと殊なる御心用意は、なほ内侍督の御おぼえ などのいみじきに、ひかれたまふにこそは」と、人々おどろき、……

（『夜の寝覚』巻四・三三七―三三八頁）

傍線部「正三位の位賜はせて」と、帝から位が贈られ、やはり四角囲みで示したように、それは督の君への寵愛ゆえだと見なされる。「正三位の位」については、諸注破格の扱いであることを

示すのみであるが、こうした桐壺更衣と寝覚の上の重ね合わせを踏まえれば、桐壺更衣の葬送の場面において、桐壺更衣に「三位の位」が贈られたこととの関わりが考えられる。

内裏より御使あり。三位の位贈りたまふよし、勅使来て、その宣命読むなん、悲しきことなりける。女御とだに言はせずなりぬるがあかず口惜しう思さるれば、いま一階の位をだにと贈らせたまふなりけり。これにつけても、憎みたまふ人々多かり。（桐壺巻・①二五頁）

桐壺更衣の場合、正三位ではなく従三位ではあるものの、帝の格別の思いから叙位が行われ、どちらも「三」という同じ数字が見えることは確かである。

なお、点線部「車もうけたまはりて、宣旨下る」については、継娘の入内に付き添い、退出の際に「御輦車などゆるされたまひて」（藤裏葉巻・③四五一頁）とされた紫の上と寝覚の上の立場の近さが、まずは思い合わされる。しかしながら、この輦車の宣旨は、帝が「『まかではべりなむ』と奏せさせはべれど、車を許しはべらぬなり」（『夜の寝覚』巻三・二六七頁）と語っていたように、寝覚の上の退出を妨げるためなかなか出されず、ようやく許されたものであった。このことは、「その年の夏、御息所、はかなき心地にわづらひて、まかでなんとしたまふを、暇さらにゆるさせたまはず」（桐壺巻・①二一頁）、「輦車の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひてさらにえゆるさせたまはず」（桐壺巻・①二二頁）と、桐壺更衣の宮中からの退出をなかなか許さなかった桐壺帝の姿を、『夜の寝覚』の帝に重ねるものであったとも見ることができる。

このように、寝覚の上には垣間見から宮中退出に至るまで、何度も「長恨歌」を背景とした桐壺巻の記述を思わせる表現が用いられる。帝がいかに寝覚の上に執着していたかが、桐壺巻を踏まえることでより鮮明に表現されていると言える。しかし、それは、一人寝覚の上だけに関わるものではなく、周囲の目には督の君の寵愛と映っていたのであり、寝覚の上退出後にも意味を持つ。『源氏物語』において重要人物の一人である藤壺の登場は、まさに桐壺更衣の死によって導かれたものであった。

年月にそへて、御息所〔桐壺更衣〕の御事を思し忘るるをりなし。慰むやと、さるべき人々参らせたまへど、なずらひに思さるるだにいとかたき世かなと、疎ましうのみよろづに思しなりぬるに、先帝の四の宮〔藤壺〕の、御容貌すぐれたまへる聞こえ高くおはします、（桐壺巻・①四一頁）

傍線部「なずらひに思さるるだにいとかたき世かな」とあるように、桐壺帝は桐壺更衣に思いよそえられる女性を求めており、そこに桐壺更衣によく似た藤壺が登場させられる。

『夜の寝覚』の帝も、寝覚の上退出後、以前寵愛していた女御

を呼び立てるものの、「火影〔寝覚の上〕には、すべてなぞらへに言い寄るべきにあらず」（『夜の寝覚』巻四・三六四頁）と、寝覚の上に思いよそえることができずに落胆していた。しかし、桐壺帝と異なるのは、帝はすでに寝覚の上によく似た人物を見つけていたことである。それが、寝覚の上の息子のまさこ君である。

かき撫でつつ御覧ずれば、髪ざし、髪のかかり、頭つきなど、火影〔寝覚の上〕のただそれとおぼゆるに、限りなく御覧ぜられつる。〔帝〕「顔はただ内の大臣〔男君〕に違ふところなからむめり。けはひ、様体こそ母君に通ひけれ」と御覧じて、……

（『夜の寝覚』巻四・三三五―三三六頁）

まさこ君は、この時九歳かとされ、まだ元服前の少年である。傍線部で示したように、帝から寝覚の上との類似性が繰り返し語られている。まさこ君への帝の寵愛は、次に示すように督の君のもとで行われるようになり、やはり督の君への寵愛と関連づけられる。

まさこ君の、いとよく通へる様体、けはひのうつくしさを、おぼしめしよそへさせたまふかたにても、中宮の御方にては、さすが、さはいへど、おぼすままにこの君をもえ近く語らはせたまはず、あなづらはしく心やすき督の君の御方にては、ありよくて、母君まかでたまひにし後は、片時も出ださせたまはず、召しまとはして、我が御方にては人目もあまりなるべき時々は、ただこの御方にて御覧じよそへさせたまふに、承香殿の御方の女三の宮をうつくしう思ひきこえさせたまふにも、いたう劣らず、らうたきものに、この御方にては御覧じ馴れなどするほど、督の君の御おぼえを、「なほ、すぐれたり」と、人も思ひ言ひ、御方々も、いかでかは心やすく。

（『夜の寝覚』巻四・三六六―三六七頁）

まさこ君への寵愛ぶりは、「まさこ君を、夜昼御前も去らず召しまとはしつつ、女御たちの御宿直の数、この君にみな押されたまひにたれど」（『夜の寝覚』巻五・五一五頁）と引き続き語られる。注目するのは、「内侍の督の君ただならぬ気色になやましうおぼいたる」（五一五頁）と、この少し後に督の君の懐妊が語られることである。まさこ君の寵愛は、督の君への寵愛が薄れる要因とはならず、懐妊をも招いたのである。

実は、督の君自身も、「草のゆかりなつかしくも思ひよそへらるる」（『夜の寝覚』巻三・三〇九頁）と、帝から寝覚の上との繋がりを意識されている人物であった。ここでの「草のゆかり」は、若紫巻に見える、藤壺と若紫との繋がりを意識させる言葉として注目されている。

宮下雅恵氏は、「草のゆかり」と言われながら血縁も容貌の類似性もない督の君と、寝覚の上と血縁も容貌の類似性もありながらも女ではないまさこ君の存在は、「〈ゆかり〉ならざる〈ゆか

り〉・〈形代〉ならざる〈形代〉を語り、そのようにして〈ゆかり〉・〈形代〉を排除している[17]」とする。しかし、督の君を藤壺に対する紫の上ではなく、桐壺更衣に対する藤壺にあたる人物として見てみると、『夜の寝覚』は『源氏物語』桐壺巻の「ゆかり」「形代」の方法をよく理解した上で取り入れようとしたと考えられる。というのも、帝がまさこ君を常に傍に置く様子は、桐壺帝が光源氏を常に傍に召していた様子と重なるのである。

源氏の君は、上〔桐壺帝〕の常に召しまつはせば、心やすく里住みもえしたまはず。（桐壺巻・①四九頁）

右は、光源氏元服後の様子である。元服前はさらに気兼ねなく女御たちのもとへも伴っていたことが、「弘徽殿などにも渡らせたまふ御供には、やがて御簾の内に入れたてまつりたまふ」（桐壺巻・①三八―三九頁）、「源氏の君は、御あたり去りたまはぬを、ましてしげく渡らせたまふ御方はえ恥ぢあへたまはず」（桐壺巻・①四三頁）といった記述からわかる。これらの点線部は、前に引いたまさこ君寵愛に関する場面での点線部「片時も出ださせたまはず、召しまとはして」「夜昼御前も去らず召しまとはしつつ」と状況的に一致する。

愛する女性の息子を常に傍らに置き、血縁はないながらもその女性を彷彿とさせる女性を寵愛する帝の姿は、桐壺巻と、『夜の寝覚』で重なる。藤壺が産んだのは実際には光源氏の子であるものの、次期春宮となる皇子を生む点でも、藤壺と督の君は同じである。もちろん、藤壺と違って督の君には寝覚の上との容貌の相似性は認められないものの、第三章で論じたように、二人は同じ典拠という「親」を持つ子同士のような存在なのである。帝が最愛の女性を思いながら、その女性を彷彿とさせる人物に対して寵愛を深めていく様子を、『夜の寝覚』は桐壺巻を意識して描き、督の君の皇子出産という展開を導き出したと考えられる。

以上、寝覚の上の垣間見場面での桐壺巻引用は、意識的に「長恨歌」と同時に踏まえられたものであり、督の君の皇子出産という後の展開を必然的に導くためのものであったことを示した。さらに、『夜の寝覚』は『源氏物語』における「長恨歌」や「長恨歌伝」といった典拠を理解した上で、その原点に遡る形でも表現を取り入れていることを明らかにした。

なお、督の君とまさこ君は、藤壺と光源氏のように密通関係には至らない。末尾欠巻部でまさこ君と恋仲になったのは、帝の最も寵愛する皇女「女三の宮」であった。寝覚の上や督の君に重ねられた『源氏物語』の「女三の宮」と同じ呼称を持つ姫宮がまさこ君と恋仲になるのは、偶然とは思われない。今後さらに考察を深める。

注

（1）『夜の寝覚』の引用は、鈴木一雄氏『新編日本古典文学全集　夜の寝覚』（小学館、一九九六年）による。以下同

じ。なお、引用文中の傍線等は全て稿者による。

（2）『源氏物語』の引用は、阿部秋生氏他『新編日本古典文学全集　源氏物語』（小学館、一九九四年―一九九八年）による。分冊を丸囲みの算用数字で頁数の前に示す。以下同じ。

（3）桐壺巻のこの表現は、「李夫人」の「丹青画出竟何益不言不笑愁殺君」を踏まえるとの指摘がある（新間一美氏「李夫人と桐壺巻」（『源氏物語と白居易の文学』和泉書院、二〇〇三年、初出　阪倉篤義氏監修『論集　日本文学・日本語　2中古』角川書店、一九七七年）など）。『夜の寝覚』が「李夫人」をも視野に入れていたかは、今後の課題とする。

（4）小松登美氏「「長恨歌」と『寝覚物語』」（川口久雄氏編『古典の変容と新生』明治書院、一九八四年）。

（5）大槻福子氏「『夜の寝覚』と長恨歌―帝と寝覚上の造型―」（『夜の寝覚』の構造と方法　平安後期から中世への展開』笠間書院、二〇一一年、初出「『夜の寝覚』の帝と女君」『中古文学』七九、二〇〇七年六月）。

（6）「長恨歌」の本文と訓み下しは、『新潮日本古典集成　源氏物語二』（新潮社、二〇一四年新装版）付録「長恨歌」（三二五―三三一頁）を参照した。以下同じ。

（7）長南有子氏「夜の寝覚の帝」（『中古文学』五八、一九九六年一一月）。

（8）『竹取物語』の引用は、片桐洋一氏『新編日本古典文学全集　竹取物語』（小学館、一九九四年）による。

（9）『和漢朗詠集』の引用は、菅野禮行氏『新編日本古典文学全集　和漢朗詠集』（小学館、一九九九年）による。以下同じ。

（10）新間一美氏「桐と長恨歌と桐壺巻―漢文学より見た源氏物語の誕生―」（『源氏物語と白居易の文学』和泉書院、二〇〇三年、初出『甲南大学紀要』文学編四八、一九八三年三月）。

（11）「新編私家集大成」（日本文学 Web 図書館）による。

（12）「新編私家集大成」は四句目「わか身よりる」。「新編国歌大観」（日本文学 Web 図書館）による。

（13）柏木由夫氏「『道命阿闍梨集』注釈（十）」（『大妻女子大学紀要　文系』五二、二〇二〇年三月）。

（14）「新編私家集大成」による。ただし、底本のカタカナ表記をひらがなに改めた。

（15）岡村繁氏『新釈漢文大系　第一一七巻　白氏文集（二下）』（明治書院、二〇〇七年、七九一頁）。

（16）佐藤えりこ氏「『夜の寝覚』におけるかぐや姫の影響―天人降下事件を中心に―」（『日本文学』八二、一九九四年九月）、注（7）長南氏の論など。

（17）宮下雅恵氏「反〈ゆかり〉・反〈形代〉の論理―真砂君と督の君をめぐって」（『夜の寝覚論　〈奉仕〉する源氏物

語』青簡舎、二〇一一年、一〇七頁、初出「『夜の寝覚』論―反〈ゆかり〉・反〈形代〉の物語」『国語国文研究』一一一、一九九九年三月）。

付記

本稿は、第六四回立命館大学日本文学会大会（二〇二〇年一二月六日、オンライン開催）での口頭発表をもとに、加筆修正したものです。ご教示を賜りました先生方に厚くお礼申し上げます。

（いけだ・あやね　福井工業高等専門学校助教）